

麥谷邦夫編

中國中世社會と宗教

道氣社

目次

はしがき

孝と佛教

眞父母考——道教における眞父母の概念と孝をめぐる——

五六世紀の佛教における破戒と異端

道観における戒律の成立——『洞玄靈寶千眞科』と『四分律刪繁補闕行事鈔』——

六朝靈寶經に見える本生譚

中世通儒考

都講の再検討

則天武后乃至玄宗朝における唐詩・山水畫の成立と六祖慧能の禪

中世の數學と術數學——科學と宗教の習合點をめぐる——

吉川忠夫 1

麥谷邦夫 19

船山 徹 39

都築晶子 59

神塚淑子 83

木島史雄 107

古勝隆一 141

荒牧典俊 163

武田時昌 203

一般語彙索引

固有名詞索引

六朝靈寶經に見える本生譚

——『太上靈寶諸天內音自然玉字』と『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』の場合——

神塚 淑子

はじめに

六朝時代に作られた道教經典、特に靈寶經と總稱される經典群の中には、佛教の影響が濃厚に見える。E. Zürcher 氏の“*Buddhist Influence on Early Taoism*”, *Young Pao*, vol.66, 1-3, 1980 はこの方面に關する先驅的な研究論文であり、そこには示唆に富む重要な指摘が多くなされている。Zürcher 氏は、六朝時代の靈寶經は“*Buddho-Taoist hybrids*”と稱することができるほど、漢譯佛典の語彙・文體・概念の諸要素の借用が顯著に見出せるとし、文體・語彙面での借用の例として、經典の冒頭と末尾の定型句、問答體の形式、偈の形式などと並んで、本生譚の模倣のことを指摘している。

道教經典である靈寶經の中に佛教の本生譚（佛の過去世の物語）を模倣した話書かれたのは、六朝靈寶經の主要テーマであった因果應報・輪廻轉生の問題と深く関わるとともに、佛教の勢力が優勢な中で道教教團の規律を形成し布教活動を行うといった現実的問題が関連していたと考えられる。Zürcher氏は本生譚の模倣が見られる具體例として、『太上靈寶諸天內音自然玉字』など數點の經典名を挙げている。Zürcher氏の論文ではそれらのごく簡単な指摘にとどまっているが、^①佛教の本生譚を模倣した話がそれぞれの靈寶經の中にどのように組み込まれているかを詳しく検討することによって、各經典の成立の背景や作者の問題意識をより一層明確にすることができると思われる。

本稿では、佛典の本生譚を模倣した話が見える靈寶經のうち、天眞皇人の過去世の物語が書かれている『太上靈寶諸天內音自然玉字』と、靈寶天尊・左玄真人・右玄真人の過去世の物語を記す『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』を取り上げて、考察を試みることにする。

一 『太上靈寶諸天內音自然玉字』に見える天眞皇人の本生譚

六朝時代に書かれた靈寶經としては、陸修靜が泰始七年（四七一）に著した「三洞經書目」に基づいて梁の宋文明が作ったとされる「靈寶經目」（敦煌文書ベリオ二八六一の二、および同三三五〇）が参考になる。^②「靈寶經目」の中に「太上洞玄靈寶諸天內音自然玉字上下」とあるが、これは、現行本では『太上靈寶諸天內音自然玉字』四卷（道藏第四九册。以下、『諸天內音自然玉字』と略稱する）に相當すると考えられる。天眞皇人の過去世の話は、その卷四（二一裏二行目から二三裏九行目まで）に見える。

天眞皇人という神格名は、『抱朴子』地眞篇や『太上靈寶五符序』卷下に見える。したがって、『諸天内音自然玉字』の書かれた江南の地においては、すでにある程度なじみのある名であったと推測される。『諸天内音自然玉字』に登場する天眞皇人の本生譚の意味あいを理解するためには、『抱朴子』地眞篇や『太上靈寶五符序』卷下に見える天眞皇人との比較検討が必要であろう。そこで、まず、『抱朴子』地眞篇と『太上靈寶五符序』卷下の天眞皇人の記述を見ておきたい。

『抱朴子』地眞篇は、「守一」のを中心に説明している篇である。その中に、黄帝が教えを授けてくれる師を求めて四方の神話的な山々を巡行したという文が見え、黄帝は峨眉山で天眞皇人に會い、「眞一の道」を請うたところ。その場面は次のように記述されている。

（黄帝）到峨眉山、見天眞皇人於玉堂、請問眞一之道。皇人曰、子既君四海、欲復求長生、不亦貪乎。其相覆不可具說、粗舉一隅耳。夫長生仙方、則唯有金丹、守形卻惡、則獨有眞一。故古人尤重也。仙經曰、九轉丹、金液經、守一訣、皆在崑崙五城之内、藏以玉函、刻以金札、封以紫泥、印以中章焉。

ここでは、黄帝の質問に對して、天眞皇人は「形を守り惡を卻く」方法として「眞一」が唯一のものであること、「守一訣」は九轉丹、金液經とともにきちんと封緘されて崑崙山に藏されていることを述べている。このあと天眞皇人は「先師」から聞いたこととして、「一」の神祕性と「守一」の效力を説いているが、その部分はこのように省略する。

『抱朴子』地眞篇のこの話は、『太上靈寶五符序』卷下にはさらに肉付けされた形で出てくる（『太上靈寶五符序』卷下では、「天眞皇人」ではなく「皇人」という語で出てくるのであるが、内容から見て『抱朴子』地眞篇の天眞皇人と同じであるのは明らかである）。『太上靈寶五符序』（道藏第一八三册）は、卷上には序文のあとに服氣の

方や存思の方が書かれ、巻中には諸々の服食の方、巻下には靈寶五符を用いた儀禮の行い方などが説明されているのであるが、その巻下の最後のところに、黃帝の四方周流譚が見える。それは、基本的には『抱朴子』地眞篇をふまえて書かれてはいるが、峨眉山における天眞皇人との會見の場面については、『抱朴子』よりもずっと詳しく記述されている。

まず、「皇人は何れの世の人なるかを知らず」とあり、その姿については、「身長九尺、玄毛體を被い、皆長さ尺餘。髪は則ち長さ數寸」というように毛むくじらの巨人と記されていて、太古の恐ろしげな神のイメージで捉えられていたことがわかる。皇人の住居の様子については、「其の居は乃ち山北の絶巖の下に在り。中は蒼玉を以て屋と爲し、黄金を牀と爲し、華羅の幃を張り、千和の香を然やす。侍者は皆是れ衆仙玉女。坐賓三人は皆太清仙王と稱す」などと説明されている。黃帝は峨眉山に行つて三ヶ月間、清齋をしたあと、皇人の前に匍匐して進み出て、『眞人食精之經』の文の解釋について教えを請う。それに對して皇人は、「此の書は乃ち生録の首篇、上天の靈符、太上の寶文なり」と言い、これは南斗君や西王母によって大切に藏されているものであるから、お前のような地上の人間に「天音」を聴かせるわけにはいかないと云つて、教えるのを拒む。しかし、黃帝はなおも熱心に教えを請い續ける。叩頭流涕して請い續ける黃帝の姿を見て、皇人の賓客としてその場にいた三人の太清仙王が助け船を出す。このあたりの記述は、『諸天内音自然玉字』の天眞皇人の本生譚と比較する上で興味深い事柄を含むので、次に擧げておこう。

又太清仙王三人、見帝勤心之至、啓助之。因告皇人曰、此人先世祖、曾遭飢困、不自飽口、割所食之饌、以粮窮餓百鳥、力作以救禽獸、胥役以贍蠢動。如此四十年、仁德感天、功蓋萬物、太上書其美、九天戡其世。故今芳氣之流、光于帝位、德乃數代、仁歸賓服。此人先立善乃爾、何爲隱眞芽之經乎。又亦是其勤求願會得見吾

耳。卿可教而成之也。皇人慨然曰、子宿世之善乃爾、吾何惜乎。可復坐、將告汝要道矣。

ここで、太清仙王は、黃帝の先祖が四十年にわたって飢饉の際に自分の食べ物を割いて餓えた動物たちを救ったため、その仁徳が天を感動させ、帝位を與えられ、黃帝に至るまで數代の間、ずっと徳政をしいてきたことを述べて、皇人が黃帝の請いに應じて教えを垂れるように促している。それを受けて皇人は、「子の宿世の善、乃ち爾り。吾何をか惜しまんや」と言つて、おもむろに教えを説き始める^①。その教えの内容は、「一身分明なれば、便ち長生すべし」として、身體中にある「眞一」「三一」を守ることの重要性和その方法の一端を説くものであった。「眞一」や「三一」についての皇人の言葉は、『抱朴子』地眞篇に出てくる文とほぼ一致する。

以上が、『太上靈寶五符序』卷下に見える皇人（天眞皇人）の話の概要である。『抱朴子』地眞篇と『太上靈寶五符序』卷下ではともに、天眞皇人は「眞一」「三一」などを存思する守一の法に關わる秘訣を黃帝に授けた神格として出てきていることがわかる。『抱朴子』と『太上靈寶五符序』はともに東晉時代の江南の地方で書かれたものであり、どちらもいわゆる葛氏道と深いつながりを持っている。靈寶經の一つである『諸天内音自然玉字』に天眞皇人が登場するのは、明らかに、これらの書物に記されたような天眞皇人の傳承を受けていると考えられる。『諸天内音自然玉字』の天眞皇人の話がこれらとどのように關わるのか、具體的には以下に見ていくことにするが、ここではさしあたり、天眞皇人が黃帝に教えた守一の秘訣が、『太上靈寶五符序』卷下では「天音」とか「天文」と呼ばれていること、また、黃帝がその秘訣を授かることができたのは先祖の仁徳によるのだと説明されていることに注目しておきたい。

さて、本題の『諸天内音自然玉字』の方に目を向けよう。天皇眞人の本生譚が見えるのは、前述のように卷四

であるが、その話はこの經典全體の文脈と深く関わっているので、『諸天內音自然玉字』の内容を順を追って概観し、關連する諸問題にも言及しながら考察していくことにしたい。

『諸天內音自然玉字』四卷の全體を通じて説かれているのは、靈寶經の天界説のひとつである三十二天をめぐる事柄である。東南西北四方の天にそれぞれに六十四ずつ、合計二百五十六あるという「諸天內音自然玉字」（八會內音自然玉字）「天書玉字」「靈書八會」「眞文」などとも呼ばれる）のことが、この經典の中心テーマである。

『諸天內音自然玉字』の卷一の冒頭には、天眞皇人の言葉として、「天書玉字」についての總論めいた短い文が載っていて、この經典が天眞皇人を主人公とするものであることを印象づける。そのあと、東南西北それぞれの天の「八會內音自然玉字」の形（これは符に似た形状のもの）とともに東方八天、南方八天、西方八天、北方八天の名稱が列擧される。その三十二天の名稱は『元始无量度人上品妙經』（以下、『度人經』と略稱し、四注本を用いる）の卷二に見えるものと同じである^④。名稱の列擧のあと、三十二天各天の「玉訣」が記される。「玉訣」では、それぞれの天に相當する八字の神祕の文字の天空における具體的なありかとその働きが記され、次いで、天眞皇人の言葉として、仙道修行者がその文字をどのように描き、服したらよいかということとその効用が述べられている。その記述が卷二の終わりまで續いているが、その中には、仙道修行者のそうした行爲によって、「七祖」の「幽魂」を「九幽」「長夜」の地獄から濟度して「南宮」に上昇させて「福堂」に入らせるといった死者救濟の觀念や、「三官罪簿」や「司命」の觀念など、靈寶經に共通して見られる特徴的な思想を見出すことができる。

卷一・卷二の文章は、全般的に淡々とした、どちらかといえば無味乾燥とも言える文體で書かれているが、第三の冒頭になると、記述のスタイルは一轉して、突如、物語性を帯びてくる。「元始天尊、時に五老上帝・十方大聖衆・無極至眞諸君丈人とともに赤明世界栢陵舍において香林園の中、長桑の下に坐す」（二表二行目）という文で始

まり、「四衆同時に俱に起ちて禮を作し、稽首して命を受く」（七表四行目）という文で終わるまでの部分がそれである。この部分の記述は、場の設定のしかたや語彙の面で明らかに漢譯佛典を模している。⁵⁾そこに書かれている〈物語〉とは、概略次のようなものである。

元始天尊の前に神々が集まっていたところ、突然、天地が眞つ暗闇になり、暗闇の天空にきらきらと輝く五色の光明があらわれた。元始天尊はそれが天の瑞應の「靈書八會」であると説明し、天眞皇人に命じてその神秘的な文字の意味するところを解釋させた。この「靈書八會」の二百五十六字は三十二天に八字ずつ對應し、「飛玄自然の氣」の凝結したものであって、上は諸天の深奥なる道を明らかにし、中は自然の氣をととのえ仙道を學ぶ人を濟度し、下は地獄の幽魂を救い出す力を持つものであった。一座の者たちは頌を作つて、元始天尊による「大乘の化」をほめたたえた。その時、恩澤が普く十方に及び、衆生の罪がすべて罪簿から削除され、全世界が一新されて、「太平」の世が實現された。

ここで述べられていることは、開劫度人説と呼ばれている靈寶經の中心思想、すなわち元始天尊による説法・救済が新たな劫の始まりの時になされるという考え方であり、これは、その救済が開劫の時に天空に出現する神秘的な文字ともになされることと一切衆生を對象としたものであるという點に救済思想としての特徴がある。⁶⁾『諸天内音自然玉字』のこの箇所は、開劫度人の時の具體的な様相が物語的な構成の中で説明されたものであると見なすことができる。

この〈物語〉のあとに、三十二天の各八字の文字の説明が長々と続く。これが〈物語〉の中で出てきた天眞皇人による「靈書八會」の解釋の實體であると考えられる。卷一・卷二ではこの神秘的な文字の形が示されただけでその解讀はなされていなかったのであるが、ここでようやく解讀がなされ、その發音と意味が説明されているわ

けである。解讀された八字の文字は、それぞれの天の「内音」と呼ばれており、これは『度人經』の「元始靈書中篇」（四注本卷四）に見えるものと全く同じである。⁷⁾ この「内音」は、それ自體としては意味不明のものであるが、「觀音」「大千」「摩羅」「法輪」「刀利」「苦」「曇」「梵」「阿」「那」など漢譯佛典に頻出する語彙や梵語の音寫字としてしばしば用いられる文字などが多く用いられている。これは、Zürcher氏が指摘しているように、梵語的な音の響きを持たせることによって、呪文としての神祕性を強めようとする意圖によるものと考えられる。⁸⁾

各天の「内音」が何を意味するかについては、次のような順序で説明されている。まず、「无量洞章」と呼ばれる、八句から成る五言詩が示される。この五言詩は、各天の八字の「内音」を中に含んでいて、偶數句の末尾字は押韻されている。そして、その後にはその詩の意味が説明される。その説明の言葉はどの詩も異口同音であり、その趣旨は要するに、その詩の中には普通の人々には知りえない天上世界の事物の名（隱名）が織り込まれているのでその詩を唱えることによって、修道者自身は長生得仙することができ、七祖の幽魂も濟度されるといふことを言っている。たとえば、東方第一天の太黃皇曾天の「无量洞章」の中に含まれる「婁都」という語は天の中心の長樓の名、「蒼秀」は帝君の遊臺の名、「愆答」は日月の門戸の名ということになっていて、この八字の「内音」を赤書したものを佩び、この洞章を唱えることによって、あらたかな效驗を得ることができると説かれている。

さて、このような形で三十二天のすべてについて、「内音」の解釋が長々と記された後で、ようやく天眞皇人の本生譚が出てくる。つまり、この本生譚は天眞皇人が元始天尊の命を受けて「靈書八會」の解釋を行った後で、自分の過去世を振り返って自ら語るといふ設定で書かれているわけである。ここでは、「龍漢以來」九萬九千九百萬重劫にわたる長大な時間の中で、天眞皇人がどのような生まれ變わりを経たかが語られる。

それによれば、天眞皇人は王門・賤家・富室・窮寒・人尊・僕使などさまざまな生まれ變わりを経、また、地

獄・畜生の三塗五苦や「五嶽の長徒、東嶽の作役」、邊夷の地での出生なども経験し、ようやく人間として比較的恵まれた条件で生まれることができたかと思うとまたもやその身は「死壞」して地獄に墮ちるということを繰り返した。しかし、そうしているうちに、ようやく天界に近づくような生まれ変わりができるようになった。そのあたりの記述を次に挙げてみよう。

……乃得受生、通靈徹視、坐見鬼神、役使召制、助國救民、或輔帝王、平斷四方。年命無幾、復受死壞、魂神乃得爲五帝賓友、交遊神仙。百年、根對竝消、地謫而(？)竟、三官都統、諸天記名、乃得受生富貴之門、王侯之家。榮祿難勝、根盡福生、發心大願、布散窮乏、廣作功德、而受滅度、徑上天堂、逍遙歡樂、衣食自然。二十四年、更生貴門、受炁智慧、五心開聰、修奉經法、賤財重道、慈心一切、恭敬師寶。功德未全、復受滅度、上昇南宮、朱陵度我命籍、三界書我功名、周流十方三十二天、交遊上聖、爲太上之賓。十年、還在人中、身作師宗、宣通法音、開度天人、教化群生。展轉億劫、無所不經、死備三官、徒對年限、垂竟而又行惡心、罪倍於常、更受死壞、復還三官、對於徒謫、苦痛過先。(三裏七行目、三裏二行目)

地上で生を受けている間に「鬼神」を役使するなど靈的な世界と通じる力を得、帝王を輔佐した後、「死壞」して「魂神」が神仙と交遊。百年後、再び地上で「富貴の門、王侯の家」に生を受けて功德をなし、「滅度」して「天堂」に上るが、二十四年後、またもや地上の「貴門」に出生。道を奉じるが、功德が足りず、また「滅度」を受けて「南宮」に上り、「十方三十二天」をめぐる、天界の神々と交遊。その後、また人間世界に生まれて、師となり人々を教化するが、またもや「死壞」して三官地獄に墜ちる……。ここには、天真皇人の多様な輪廻轉生の過程が、四字句を基調とする漢譯佛典風の文體で、淡々と羅列されている。この文で注目されるのは、漢譯佛典では普通、梵語 *niryāna* の譯語として用いられる「滅度」という語が、ここでは、それとはやや異なる意味あいでも用いら

れていることである。この「滅度」という語は、普通の死を意味する「死壞」という語とは使い分けられているが、完全には輪廻轉生のサイクルからは抜け出ししてはいない状態を指している。天眞皇人は「滅度」したのち、「天堂」に上って「逍遙歡樂、衣食自然」の境遇を得、あるいは「南宮」に上って「上聖と交遊し、太上の賓となる」ことはできたが、その後、また人間世界に還り、さらにまた「死壞」して「三官」に還り、地獄の苦役をなめるといふことになっている。しかし、「億劫」にわたる長大な年月の、人界と天界および鬼界の度重なる往還が、しだいに天眞皇人を三界からの完全なる超脱に近づける。上に挙げた文に續けて次のようにいう。

如此一善一惡、一緩一急、一死一生、一惱一歡、艱辛轉軻。億劫之中、諸惡漏盡、福德自生、乃得還在富貴之門、道得因緣、供養經法、七寶告靈、發心善願。功名得全、爲三界所舉、五帝所明、降致雲輿、八景瓊輪、駕空乘浮、白日昇晨。被蒙天尊曲速重恩、拂飾朽骸、得見光明、超凌三界、位登天眞。今日侍座、歡樂難言。

(二三裏二行目、二三裏九行目)

ここで、果てしなく續くかと思われた輪廻轉生もようやく終わりの時を迎える。人界での「富貴の門」で積んだ功德が完全なものとなり、天界から降された「雲輿」「八景瓊輪」に乗って白日昇天した後、天尊の特別な恩顧を蒙って、新たな肉體を得て三界を超越し、ついに天眞(天眞皇人)の位に登り、天尊に侍座することとなったことを述べている。

以上が天眞皇人の本生譚である。この本生譚のあと、さらに天眞皇人の言葉は續き、話は『諸天内音自然玉字』の中心テーマである神祕の文字のことに戻る。上述のように、卷三の冒頭部で天眞皇人が元始天尊から命じられて「靈書八會」の解釋を行ったのであるが、それができたのは、「億劫以來、天元に遊涉し、法に隨って生死し、恆に眞文に値」(二四表二行目)って「天書」のことを知り、天界の事物や「天音」のことを少しは知っていたから

であると天眞皇人は自ら説明している。そして、最後に天眞皇人は、僞道が行われる時はこの文は「大羅の上、七寶宮中」に隠されるが、大聖が興隆する時、この眞經が地上にもたらされ、普く一切の濟度がなされて、「歡樂」の世となることを述べて、長い長い言葉を終える。

『諸天内音自然玉字』に記された天眞皇人の本生譚、すなわち、その「億劫」にわたる輪廻轉生と三界からの超脱の道すじは、佛教の輪廻轉生の思想と、神仙思想・白日昇天の觀念とが融合して成り立っている。このような考え方の中には、靈寶派にやや先立って興隆した上清派の思想と共通する部分も見られる。たとえば、仙・人・鬼の三部世界觀や「南宮」のことなどは『眞誥』に見えるし、上の文中の「上聖と交遊し、太上の賓となる」というような記述は、同じく『眞誥』や『皇天上清金闕帝君靈書紫文上經』など上清派の文獻に頻出する天界遊行のイメージと相通じるものである。そもそも、重要な神々の修行の過程を記した傳記を作ること自体も、『上清後聖道君列紀』など上清經の中にすでに例があり、それはさらに遡れば、魏華存などの上清派の眞人たちの修行過程を記した「内傳」類に起源を持つものであった。¹⁰ それらの點では、天眞皇人の本生譚も、上清派と共通の思想基盤の上に成立していることがわかる。

しかし、この天眞皇人の本生譚の何よりも大きな特徴は、神格の過去世が敘述されているという點、すなわち、神格の傳記が本生譚という形で書かれているということ自体にあるだろう。上にその一端を記したように、長々と羅列的に輪廻轉生の過程を敘述するという形から見ても、この經典の作者の主たる關心は、天眞皇人という一神格がこのような無限とも思える長い時間の中でさまざまな生まれ變わりを経てきたということを示すこと自体にあったと考えてよいであろう。このことはまた、『抱朴子』地眞篇と『太上靈寶五符序』巻下に見える天眞皇人の傳承と比較することによっても明らかである。『抱朴子』や『太上靈寶五符序』では天眞皇人の過去世のことはも

ちろん全く書かれていなかった。ここで注目したのは、上に述べたように、『太上靈寶五符序』巻下では、黃帝が先祖以來の仁徳を認められて天眞皇人から教えを受けることができたことと書かれていたことである。『太上靈寶五符序』巻下では、教えを受ける側の條件として、黃帝の「先世祖」「宿世」の徳行のことが言われ、『諸天内音自然玉字』の方では、「天文」の祕密を世の人々に開示した天眞皇人がなぜそのようなことができるようになったかの説明として、天眞皇人自身の長い輪廻轉生とそれからの解脱の過程が記述されている。黃帝と天眞皇人という違いはあるが、どちらも累代の善行が最終的に「天」の世界に近づく要因となったという点では同じである。ただ、大きく異なるのは、『太上靈寶五符序』巻下の場合には先祖（およびそれを繼承した黃帝自身）の善行であったのに対して、『諸天内音自然玉字』の方では天眞皇人という一個人の過去世からの行いの積み重ねであるという点である。前者は、因果應報の問題を祖先から子孫へと繼承されるものと捉える中國的な考え方に立脚し、後者は、因果應報というものを、一個人が無限の過去から現在、そして未來へと背負うべきものと捉えたインド佛教的な考え方に基づいている。前者から後者へとという變遷の中に、『太上靈寶五符序』巻下に見えたような古い形の天眞皇人の傳承の要素を受け継ぎつつも、『諸天内音自然玉字』ではそれを輪廻轉生・因果應報という佛教的枠組みの中で新しく作り替えていこうとした意圖がうかがわれ、それは六朝時代の靈寶經の作者たちが大きな關心を注いだものが、まさにこの輪廻轉生・因果應報の問題であったことのあらわれと見ることでできよう。

天眞皇人は、『諸天内音自然玉字』の中で、諸天（三十二天）の「内音」を解讀・説明するという重要な任務を負っている。このような任務を天眞皇人が擔うとされているのは、おそらく、『太上靈寶五符序』巻下において、天眞皇人が黃帝に「天音」や「天文」とも呼ばれる守一の祕訣を授けたとある（上述）ことと關係するであろう。天上の神々の世界に祕藏されている長生の祕訣もしくは宇宙の眞理の一端を地上の人々に伝える役目を果たした

神格として、すでに江南の地の人々になじみのあった天眞皇人という名が、新しい靈寶經のひとつとして『諸天內音自然玉字』が書かれる際に、同じような役目を擔うものとして用いられたものと考えられる。

天眞皇人が諸天の「內音」について解讀・説明した言葉は、上にも少し述べたように、『度人經』に見える「元始靈書中篇」（四注本卷四）の注釋書的な性格を持つている。『度人經』は六朝時代に作られた靈寶經の中でも最も中心的な經典であり、したがって、そこに記された天の祕密の「內音」を、元始天尊に命じられて解釋した天皇眞人は、當然ながら、六朝靈寶經の中できわめて重要な神格として位置づけられていたことになる。だからこそ、天皇眞人の傳記が書かれる必要があると考えられたのであろう。重要な神格の傳記を作るということは、上述したように、「內傳」類から上清派の眞人たちの傳記へという、先行の流れがすでにある。『諸天內音自然玉字』に記された天皇眞人の本生譚は、それらを背景として出てきたものであるが、その中に、靈寶派の主張する宗教思想の重要な要素を導入し、「龍漢以來」の「億劫」にわたる長大な時間軸の中における輪廻轉生とそこからの解脱を體現した存在として、一つの新しい道教の神格像を描いたものであったと言えよう。

二 『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』に見える靈寶天尊・左玄眞人・右玄眞人の本生譚

『太上洞玄靈寶智慧定志通微經』（道藏第一六七冊。以下、『定志通微經』と略稱する）は、「靈寶經目」にそのままの名前が見える。この經典は、いわゆる「兩半」思想を説いたものとして、隋唐期に重視されていた。『本際經』の思想に影響を與え、『道教義樞』に多く引用されている。また、司馬承禎『坐忘論』にも一部、引用されている。

『定志通微經』では、冒頭から靈寶天尊と左玄眞人・右玄眞人が登場し、主として、天尊（靈寶天尊の略稱）と

二眞（左玄眞人と右玄眞人）の對話の形で話が進行しており、經典全體が一つの脈絡を持つ物語として構成されている。この三神格にまつわる本生譚が見えるのは、九表七行目から一六表九行目までの箇所、量的には經典全體の約三分の一を占める。この本生譚も、天真皇人の場合と同じく、やはり經典全體の構成・内容と深く関わっている、はじめから順を追って經典全體を概観しながら、その特徴を見ていくことにしたい。

『定志通微經』は、まず靈寶天尊が玄都七寶紫微宮において靜かに思索にふける場面から始まる。思索の内容は、人はなぜ三界五道を輪廻する苦しみの運命に陥ってしまうのかということである。「萬兆造化の始めを思念するに、胎稟は是れ同じ。各々氤氳の氣に因り、凝りて神を成す。神は本と澄清にして、湛然として雜無し。既に有る形を授納するや、形六情に染まる。六情一たび染まれば、動きて弊穢に之く。見る所に惑い、著く所に味まされ、世務因縁、次を以て發し、罪垢を招引し、歷世彌々積む。三界に輪廻し、颺浪して反るを忘れ、五道を流轉し、長淪して悟らず。痛毒を嬰抱して、自ら知ること能わず、神を馳せて惶悸し、唯だ罪を是れ履む」。

天尊はこのように、すべての人がもともとは清らかな「神」「氣」を持っていてもかかわらず、「形」を有するが故に、「六情」に染まり、その後、どんどん汚穢の方向に走り、罪が積み重なって、五道輪廻から抜け出すことができないのだと考える。因果應報・輪廻轉生のもとになる根本のところを目を向け、それを「神」「氣」「形」など中國の傳統的概念によって説明し、衆生は根元的には救済される可能性があることを言ったものである。

このように考えて衆生を哀れんだ天尊は、左玄眞人と右玄眞人を召しよせ、二眞人による衆生教化の様子を尋ねる。二眞人は、人々に罪福を説いて教えても、人々の信心は長續きせず、すぐに怠けてしまうと嘆く。それを聞いた天尊は、人々を怠けさせないためには簡易な教えを説くのがよいのだと言って、「思微定志要訣」を二眞人に授ける。「思微定志要訣」を授けるにあたり、天尊は、この要訣が衆生を得道に導く重要な手がかりになるのだと

いうことを、海中の珍寶を探す時、導師がいなければ寶は得られないという譬喩と、山中の綬を相師だけが探し出すことができるという譬喩で説明する。海中の寶を探す譬喩は、竺法護譯『生經』卷一「佛說墮珠著海中經第八」（大三、七五中〜七六上）の話からヒントを得ていると考えられる。

ついで、天尊は要訣を語る。それは、「三界の中、三世皆空なり。三世の空を知れば、我が身有りと雖も、皆應に空に歸すべし。空に歸するの理を明らかにすれば、便ち能く身を忘る。能く身を忘るる者は、豈に復た身を愛せんや。身既に愛さざれば、便ち能く一切都て愛する所無く、唯だ道を是れ愛す。能く道を愛する者は、道も亦之を愛す。道の愛を得る者にして、始めて是れ眞に反る」というもので、要するに、空の思想を體得して、根源の道、眞の世界に歸るということを説いている。そして、この「思微定志」の要諦がわかれば、「兩半成一」に歸ることができるとし、天尊の質問を受けた二真人が「兩半成一」の五義を解釋する。その解釋は、「不亦於彼清虛之炁、因氤氳之交、分半下降、就此四半、合爲一耶。不亦或此假二而爲惡者、致招自然之炁、淪於三塗乎。不亦爲善離此四半、還登太虛、復我清虛之氣、反我兩半、處於自然乎」というように、「不亦」で始まる三つの文から成る。その後で、天尊は「兩半輪轉圖局」（一名「思微定志眞券」）を空中に示し、左玄真人の前に下す。道藏『定志通微經』の第六葉には、この圖が描かれている。二真人による「三不亦」で始まる解釋の文とこの圖が、思想的には『定志通微經』の最も中心部分であり、『道教義樞』卷三「兩半義」に引用されて詳しく論じられている。¹¹

その後、天尊は、この要訣は十戒の實踐を根本とすると言い、兩半の訣を授けると次には十戒を授けなければならぬと述べて、十戒の項目と法師が弟子に十戒を授ける時の方法とを具體的に説明する。それらの言葉が終わった後、上方空中に人が現れて、思微定志の法を讚えるときにも法の傳授を慎重にせよと戒める内容の頌を誦する。その時、左玄真人と右玄真人は、何かまだ少し釋然としないものがあると感じていた。二真人の氣持ちを見抜

いた天尊は、「一切の善惡には皆因縁がある」と前置きして、天尊と二真人の過去世の物語を語り始める。上に述べた『諸天内音自然玉字』の天眞皇人の本生譚が、輪廻轉生の履歴の列擧だけの平板な記述であったのに對し、この天尊と二真人の本生譚は複雑で起伏に富んだものになっていて、物語的要素の濃いものである。それはおおよそ次のような内容のものである。まず、天尊が以下のような長い話をする。

無數劫の昔、巨萬の富を築いた道民の樂淨信は、自分に與えられた福德に感謝して、天地（道）の恩に報いた
 いたと思つたが、道は財を必要としておらず、どのようにして報恩の心を表現したらよいだろうかと妻に相談
 した。妻は、「道は心から生じるものです。道士に供養して齋戒をしてもらうことが、道に報いるということ
 になるでしょう」と言つた。樂淨信は妻の言葉を聞いて悟りを開き、山中で長齋・誦經の修行に勵む道士に對
 して經濟的な奉仕を行う決意をし、香・布・臥具・服飾・藥など種々の品物を道士に奉り、あわせて道士の身
 の回りの世話をするための十人の奴を送つた。道士はそれらを受け取つた。樂淨信夫妻は喜んで、その後も
 ずっと道士に供養し續けた。夫妻は死に臨んで、十七才になる一人息子の法解に、「私が豊かな財産を得たの
 は、道のおかげだ。道の極まりない恩に報いるために、私は道士を供養してきた。お前もこれを續けてくれ
 るように」と遺言する。法解は泣き崩れながら、「どうか、お父さん、お母さんがただちに福堂に登り、高尊
 の位に至りますように。私も死後、一緒に道位につくことができますように」と言う。夫妻は生前、道士に對
 する供養を最も優先させていたとはいへ、親族・郷里の人々もその恩恵を受けていたので、その葬儀には多
 くの人々が駆けつけ、法解の孝心に涙を流した。

法解はその後、両親にもまして熱心に道士を供養し、貧しい人々を救濟し續けた。そのため法解自身も貧しく
 なり、道士を十分に供養することができなくなった。道士も年老い、法解の恩に報いたいと思つたがその術

がなかった。ある時、道士は使者を通じて、法解にいつものように六時行道の齋を行いたいと知らせてきた。法解は喜んで齋のための布施をしたいと思つたが、屋宅を賣ることも、自分の身を賣ることもできず、その費用を捻出することができない。法解夫婦には十一才の胤祖と八才の次胤（阿奴）という二人の優れた男の子がいた。法解の妻の姉には子どもがなく、常々、二人の子のうちのどちらかを欲しいと願つていた。法解はそのことを思い出し、妻に一人の子を姉に賣つて道士を供養することを相談する。妻は初めは反対したが、法解が「先君の遺教」を守りたいのだと言つたと納得し、阿奴を連れて姉の所へ行く。姉は喜んで五十萬錢を妹に渡し、阿奴を自分の子にし、さらに十萬錢を阿奴に與えた。阿奴はそれを父母に六萬錢、兄の胤祖に二萬錢、山中の道士に二萬錢、供養した。法解夫妻と胤祖は次胤をただ一人遠い所にやつてしまったことを悲しみ嗚咽するが、法解はその金錢で齋具を買い求め、道士に供養する。驚いた道士に事情を聞かれた法解は、ありのままに答え、そのまま齋が執り行われた。齋が終わり、法解が家に歸つてみると、奇跡が起こり、家の倉庫には、金銀、珠玉、絹布、米鹽、五穀があふれていた。

法解夫婦は喜び怖れて、道士にわけを聞きに行くと、道士は、これは法解らの深い敬信の情が招いた「天卍」（天の哀れみ）であると言つた。法解は王に對してもこの出來事を報告したが、王も道士と同じ答えをした。その後、法解らはますます篤く信仰し、幸せが長く續いた。

以上の長い話をし終えた後、天尊は、その時の樂淨信は今の天尊自身がそれであり、法解は今の左玄真人、法解の妻は今の右玄真人がそれにあたるのだと説明する。すると、そこに、八色の雲の車に乗った二人の人が天空から降りてきて、天尊と二真人に拜禮をする。その二人は、法解夫妻の子ども、胤祖と次胤であった。そしてさらに二真人は、かつての樂淨信の妻が今の中候太夫人であることを知る。

以上が、天尊と二真人にまつわる過去世の物語である。この本生譚には、いくつかの興味深い事柄が見出せる。まず第一に注目されるのは、志怪小説との關係について。この話は、志怪小説の佛教靈驗譚と似ている點があり、會話文が多くて、「阿爺」「阿婆」など口語の語彙が多く用いられている。また、次胤を賣る場面に最も顯著に見られるように、各場面における登場人物の心理描寫にも氣が配られている。六朝時代の靈寶經の作者たちと佛敎靈驗記的な志怪小説の作者たちとは、地域的にも宗教心理的にも近いところにいたことが推測される。¹³ 第二に注目されるのは、漢譯佛典との關係について。法解夫妻は道のためにわが子を布施したが、このようなストーリーは吳の康僧會譯『六度集經』卷二「須大拏經」に見える須大拏とその妻の物語(大三、七下、一一上)と共通點があることは、すでに Zürcher 氏によって指摘されている。¹⁴ また、最後のところで天尊は「時の樂淨信は吾が今の身是なり。法解は左玄真人是なり。法解の妻は右玄真人是なり」と語っているが、このように過去世の物語が語られた後に、その物語の登場人物が、實は今、それを語ったり聞いたりしている人自身であるというパターンは、『法句譬喻經』や『六度集經』などの佛典に頻出する。これらは、靈寶經の作者たちが輪迴轉生・因果應報の思想を道教の中に取り込み、それを人々にわかりやすく説くために、こうした佛教説話の類を積極的に用いたということを示している。第三に注目されるのは、「報恩」と「孝」が強調されたり、人間の一途な思いが天を感動させて奇跡が起るといった中國の傳統的な觀念が濃厚に見られることである。樂淨信が道士を供養したのは、「道の罔極の恩に報いる」ためであったし、その遺志を繼いだ法解は「先君の遺教」を奉じて道士に供養するためにわが子を賣るという極端な行爲を行い、それが天を感じしめて奇跡を生んだ。このように、「報恩」や「孝」、あるいは「天」の報施といった、きわめて中國的なものがこの物語の中に見られるということは、六朝時代、靈寶經を作った人々、または、それを受け入れようとした人々が、新しい宗教、新しい經典に求めた事柄の最も中心的なものは、實はそれ

ほど新奇なものではなく、むしろ中國古來の傳統的な觀念の延長線上にあるものだとすることを示唆していよう。

さて、過去世の物語が記された後、『定志通微經』は本題に戻り、二真人が天尊に、この經典（實際は「思微定志」の要訣と「兩半圖局」を指すのであろう）を傳授する時の規則について質問する。それに對して天尊は、右玄真人が弟子に經を傳授する際、法信は必要でないが、左玄真人の場合は、上金五分・素絲五兩ほか所定の法信が必要であると答える。それは公平に缺けるのではないかとという左玄真人の質問に對し、天尊は、兩者は殊途同歸であると述べ、そのようにする理由として、右玄真人の弟子は「桑門の居士」であり、乞食・布施の習慣があるが、左玄真人の弟子の方にはそれが無いからと説明している。ここの論理はやや難解であるが、左玄真人に道教を、右玄真人に佛教を擔當させるという形で、佛教を包攝しつつ、それを越えるものとして自らを位置づけようという意圖がうかがわれる。この道教と佛教の關係を述べる場面において、先ほど語られた、右玄真人が左玄真人の妻であったという過去世の關係が、伏線として生かされているように思われる。

その後、天空から降りてきていた昔の胤祖・次胤兄弟が、左玄真人から思微定志要訣を受け、悟りを開いて仙界に上る。その時、空中に天人が現れ、そもそもこの經がない時に天尊はどのようにして得道したのだろうと疑問に思う。それを察知した天尊は、〈天尊の行いが「純朴」で「自然」に合致していたから「玄悟」したのだ。「玄悟の理」にはもともと「文字」などなく、「經」は後で撰集してできたのだ〉と教える。道教經典そのもの、あるいはそこに書かれている文字が、本来、人間世界の次元のものではなく、「天」や「自然」に由来するものであり、それゆえに尊いのだという考え方は、六朝時代の道教に共通して見られるものであり、ここでもそのことが確認されている。

『定志通微經』はその後、突然、話題が變わり、十二人の若者が登場する。若者たちは歡樂を盡くしていたが、

天尊は道眼で彼らの前世を見て、彼らには濟度すべき縁があることを知り、自ら凡人に化作して若者たちの所へ行く。若者のうち五人が順にそれぞれ飲酒の戒、妄語の戒、盜の戒、淫の戒、殺生の戒を守ることが難しいと述べるが、化人(天尊)は持戒の重要性を、偈を交えながらわかりやすく説いた後、本當の姿をあらわして天空に浮かぶ。若者たちはそれを見て悟り、左玄真人のところへ行つて經典と十戒を乞う。その場面で『定志通微經』は終わっている。『定志通微經』の最後のところに、このような話が記されるのは、この經典のはじめの方で十戒のことが説かれていたのと相應じるものと考えられる。この若者の話については二つの點で注目される。第一に、天尊が道眼で人の前世を見抜き、その人を濟度するために化人になって教化するとあるが、そのような話のパターンは、『法句譬喻經』にしばしば見え、ここの話はそれを借用したと考えられること。上に述べた本生譚の所でも指摘したが、この『定志通微經』は、『生經』や『法句譬喻經』など本緣部の佛典の影響が目立って大きいと言える。第二に、戒の嚴重な遵守が求められているのではなくて柔軟な對應が許容されていること。たとえば、飲酒の戒について、服藥後の散發のための飲酒は適量であれば認められている。はじめの部分で、十戒の項目を擧げているところでは、「五者不醉、常思淨行」とあっただけであるが、ここでは若者と化人との對話を通して、戒の守り方が具體的に説かれ、當時の道教の實態に合わせ、飲酒の戒が人々に受け入れやすい方向に變えられている。このあたりは、この經典が實際の布教活動を背景に持つて書かれたことを示唆していよう。

以上、靈寶天尊・左玄真人・右玄真人の本生譚を含む『定志通微經』の全體の内容を、問題點を指摘しながら概観した。この經典は、『度人經』とはまた違った意味において、六朝隋唐時代において影響力を持っていた。「兩半」思想が隋唐期の道教で重視されたことはすでに述べたが、この本生譚そのものも比較的良好知られていたやうである。『隋書』經籍志・道經の部に、道教經典の神格の記述を批判して、「自云天尊姓樂名靜信」という文が

見えるのは、そのことを示唆している。「樂靜信」は明らかにこの本生譚の「樂淨信」のことであろう。また、左玄真人法解という神格は、『本際經』をはじめ隋唐期のいくつかの道教經典に道君や天尊の弟子として登場している¹⁵。さらに、興味深いことには、『洞玄靈寶千真科』（道藏一〇五二冊）に、女性の出家入道が許されることになった由來として、樂淨信の妻が仙界で（金）中候太夫人となり女性の入道に關わっているということが述べられており、意外な所にこの本生譚が用いられている。あるいは、現存する六世紀の道教造像の中に二尊像の形式のものがあるが、それは左玄真人と右玄真人を表したものだとする見方もあり、また、この時期に多く見られる道佛混淆像の形式にこの經典に記された二真人の役割が影響を與えたとする見方もある¹⁶。これらの問題については改めて考察したいと思うが、いずれにしても、『定志通微經』の天尊と左玄・右玄二真人の本生譚は、六朝から唐初にかけての道教の教團や信者たちの實際の行動にも關わる重要な意味を持つていたということは確かであろう。

(1) Erik Zürcher "Buddhist Influence on Early Taoism", *T'oung Pao*, vol.66, 1-3, 1980, pp.102-104.

(2) 大淵忍爾『敦煌道經 圖録編』（福武書店、一九七九年）七二五～七三四頁参照。

(3) この文中の「此人先世祖」を「この人（黄帝）の先祖」と解し、「宿世」も同じ意味で理解した。「此人先世祖」の「祖」を行字と見て、「先世」「宿世」はいずれも黄帝自身の過去世を指すという解釋も考えられるが、先祖が生前に爲した陰德によって子孫に福德・榮光が與えられるという觀念は、『眞誥』をはじめとするこの時期の道教文獻に顯著に見えるので、ここでは一應このように解釋した。ちなみに、「先世」を「宿世」と同じ意味で使うことは、『眞誥』に例がある。『眞誥』卷一五（三裏）「利（李廣利）宿世有功德。利今亦在南宮受化。」（陶弘景注）廣利爲漢武名將、伐大宛時、所殺戮殊不少、以先世功德、遂能消之。ただし、『眞誥』のこの例は過去世の意味で使われている可能性も強い。

- (4) 六朝時代の道教經典に見える諸々の天界説については、麥谷邦夫「道教における天界説の諸相」(『東洋學術研究』第二七卷別冊、一九八八年)参照。
- (5) 『諸天内音自然玉字』のこの箇所については、拙著『六朝道教思想の研究』(創文社、一九九九年)二七七―二七九頁で言及したことがある。
- (6) 開劫度人説については、前注所掲拙著第二篇第三章参照。
- (7) 『度人經』(四注本)巻四には、この「内音」を載せた後に「道言、此諸天中大梵隱語、無量之音。舊文字皆廣長一丈、天真真人昔書其文以爲正音」とあって、『靈寶諸天内音自然玉字』と相應している。四注のうち、唐の李少微注は全面的に『靈寶諸天内音自然玉字』によっている。
- (8) Zürcher 前掲論文一〇―一一頁。Zürcher氏はここでいくつかの「内音」について梵語への比定を試みている。
- (9) 靈寶經において「滅度」という語が漢譯佛典のそれとは異なる意味で用いられていることについては、Stephen R. Bokenkamp “Death and Ascent in Ling-pao Taoism”, *Taoist Resources* 1, 1989. に指摘がある。
- (10) 前掲拙著第一篇一章・第二篇三章などを参照。
- (11) 「兩半成一」の思想については、麥谷邦夫「南北朝隋唐初道教教義學管窺——以『道教義樞』爲綫索——」(辛冠潔他編『日本學者論中國哲學史』、中華書局、一九八六年)三〇三―三〇七頁、山田俊『唐初道教思想史研究——』(太玄眞一本際經)の成立と思想——(平樂寺書店、一九九九年)二六二―二七二頁参照。
- (12) このことについては、拙稿「靈寶經と初期江南佛教——因果應報思想を中心に——」(『東方宗教』第九一號、一九九八年)で言及したことがある。
- (13) Zürcher 前掲論文一〇三頁。
- (14) 前掲拙著第二篇付章参照。
- (15) 山田俊前掲書一四七―一四八頁参照。
- (16) 都築晶子「六朝隋唐時代における道教と女性」(『名古屋大學東洋史研究報告』第二五號、二〇〇一年)参照。
- (17) Anna Seidel “Le sūtra merveilleux du Ling-pao Suprême, traitant de Lao Tseu qui convertit les barbares (le manuscrit S.2081)”, *Contribution aux études de Touen-houang*, Vol. III, Paris: PEFEO 135, 1984, pp.332-336.

Stephen R. Bokenkamp “The Yao Boduo stele as evidence for “Dao-Buddhism” of the early Ling-pao scriptures”,
Cahiers d'Extrême-Asie 9, 1996-1997, pp.65-67.

CONTENTS

Preface

- Filial Piety and Buddhism in China. YOSHIKAWA Tadao 1
- The Authentic Parent in Daoism in Relation to the Virtue of Filial Piety.
MUGITANI Kunio 19
- Breaking the Precepts and Committing Heresy in Buddhism of the 5th and
6th Centuries. FUNAYAMA Toru 39
- The Formation of Daoist Monastic Discipline as Seen in the *Dongxuan ling-
bao qianzhen ke* and the *Sifenlü shanfan buque xingshi chao*.
TSUZUKI Akiko 59
- Daoist Jātaka in the Lingbao Scriptures of the Six Dynasties.
KAMITSUKA Yoshiko 83
- A Historical Study of *Tongru* in Medieval China. KISHIMA Fumio 107
- Reexamining the Role and Position of the *Dujiang*.
KOGACHI Ryuichi 141
- Wang wei's* Landscape Poetry and Painting under the Influence of the Sixth
Patriarch *Hui neng*. ARAMAKI Noritoshi 163
- Mathematics and Numerology: The Merging of Science and Religion in
Medieval China. TAKEDA Tokimasa 203

Religion in Medieval Chinese Society

edited by
MUGITANI KUNIO

DOKISHA
2002

執筆者紹介

吉川忠夫（よしかわ ただお）	龍谷大學文學部教授
麥谷邦夫（むぎたに くにお）	京都大學人文科學研究所教授
船山 徹（ふなやま とおる）	京都大學人文科學研究所助教授
都築晶子（つづき あきこ）	龍谷大學文學部教授
神塚淑子（かみつか よしこ）	名古屋大學情報文化學部教授
木島史雄（きしま ふみお）	愛知大學現代中國學部助教授
古勝隆一（こがち りゅういち）	京都大學人文科學研究所助手
荒牧典俊（あらまき のりとし）	大谷大學文學部教授
武田時昌（たけだ ときまさ）	京都大學人文科學研究所教授

中國中世社會と宗教

2002年4月12日 第1刷發行 非賣品

編者 麥谷 邦夫

發行者 麥谷 邦夫

發行所 道氣社

京都市左京區北白川東小倉町47

京都大學人文科學研究所麥谷研究室內

印刷所 中西印刷株式會社

ISBN4-9901215-0-3 C3022